

15. 治療を困難にするもの（家族側の要因）

I. 家族は追い詰められている（不幸な悪循環）。

今までは、主に本人側の治療困難要因について述べて来たが、今度は家族の側の治療妨害要因を取り上げてみる。

家族は一般的に善良で愛情深い人たちが多く、もちろん、本人の治癒を願っている。それが、不思議なことというか当然というか、治療に反する行動を取ってしまうのである。これは、一言で言えば、家族の愛情が適切に生かされていないということなのだろう。患者が「治りたい」と思いながら、不適切な行動を取ってしまうのと同じで、追い詰められた家族もまた、適切とは言えない態度を取ってしまう、あるいは取らされてしまう。そして、患者本人との間で、不幸な悪循環が始まるのである。

ここでは、ごく簡単に家族の困惑、苦悩やその結果としての治療妨害的現象を拾い上げてみる。詳しいことは、後の家族とのかかわりの章で具体的に細かく記していきたいと思う。

II. 家族の困惑

まず、家族は多くの点で戸惑いの中に置かれる。例えば、突然の引きこもり・不登校・不就労や突然の暴言・暴力、拒食・過食など、または妄想（「誰かに監視されている」「盗聴器が付けられている」）、幻聴（「自分の悪口が聞こえる」）などを代表とする奇異な言動に出会って困惑してしまい、どうしていいかわからなくなる。

III. 自覚や治療意欲の無さに対する困惑

このような事態に出会うと家族は動揺し、まずは医者の方に行かせようとする（一部、霊能者や占い師などに相談する人もいるが）。それはそれで当然の行為だが、これに対して本人の自覚や治療意欲が十分でなかったり、また精神科恐怖が強かったりして、病院やクリニックに行こうとしない。これで、ますます病状は悪化し、家族の困惑は大きくなる。

仕方がないので、家族だけで相談に行こうとすると、未だに「本人を連れてこないとどうにもなりません」という精神科医もいたりして、家族はますます追い詰められてしまう。

IV. 病気や病状理解の困難・精神病恐怖

やっとの思いで、病院に連れて行っても、そこで正しい説明や納得いく理解が得られるとは限らない。ひどい場合には、単に投薬だけで、何の説明もない場合がある。

説明をしてもらっても、単に「うつ病です」「統合失調症です」「薬を飲む必要があります」とだけしか言われない。家族は、恐れの中にいることが多く、統合失調症などと、言われると「子供は普通の人間からはずれてしまった」「不治の病にかかってしまった」と落胆しやすい。病名の告知というのは、するとすれば、治療に有益になるように慎重にせねばならないのに、不用意に雑にしてしまう治療者がいるので、家族はますます、落ち込み・恐怖・

混乱をきたすのである。

家族が知りたいのは「何故、こんな症状・現象が起きるのか」といったことだが、それに対する適切な説明がなされないと、家族の困惑はひどくなる。

V. 見通しを持ってないことの不安

それとともに、家族を不安にさせるものは、今後、どうなるかといったことの見通しを持ってないことである。精神科医がちゃんと見通しを言え、その根拠についても説明し、納得できる形で治療が始まればいいが、ちゃんと、治療目標を設定・共有し、「家族の良き接し方・悪しき対応」「治療の速度を左右する要因子」などを家族が分かるように説明して、治療という「大きな共同作業」に向かえるというのは、臨床の現実を見れば、少なそうである。

VI. 愛情・努力が通じないことの悲しみ・困惑

家族は、概ね、一生懸命、患者に気を使ったり、愛情を込めて接しようとするが、患者の反対や拒否にあって、落胆や困惑を強めやすい。例えば、健康のためを思って、朝起きるように勧めたり、散歩に誘ったりしても拒否される。では、何も声かけずに、そっとしておく「ほったらかし」と言われる。

特に、治療のためと思って、通院や服薬を勧める時など、患者の抵抗にあってトラブルが生じやすい。家族は、こんな時、一方的に勧めるだけで、薬を飲みたくない理由や、病院に行きたがらない理由まで聞く余裕も知恵もないことが多い。

家族は、こんな時「これだけ、一生懸命やっているのに、感謝どころか、怒りっぽくなるなんて、どういうことかしら」と、この点でも、困惑がひどくなるのである。

[以上のように家族は追い詰められたり、疲れたり、困惑することが多い。そのためもあって、以下のように患者への対応が不適切・不十分になりやすい。

VII. 傾聴が困難

家族は概して、人の話を聞くことが困難な人が多い。これはいろんな理由があるだろうが、一つには、本人の病のせいで、家族自身が追い詰められて余裕がなくなっているせいも大きいかもしれない。

患者本人は、まずじっくりと話を聞いてほしいのであるが、それが長いものであったり、同じことの繰り返しであったり、不愉快な内容であったり、まとまりのないものであったたりすると、よけい家族は本人の話を聞きにくくなる。

家族は、また治療者の話を聞くのも難しいことが多い。従って家族に説明する場合、正しく聞き取れているかどうか考えながら話す必要がある。

VIII. 本人の気持ちの理解が困難

家族は、話を聞くのが苦手なだけでなく、本人の気持ちの理解が困難である。

例えば、人に会うことの辛さ、学校や会社に行くことの辛さ、薬を飲むことの辛さ、通院することの辛さ、会合に出ねばならない辛さなどである。本人は、普段は当たり前のことだ

と思っていることができなくなっているのが辛いのだが、家族は見過ごしてしまうことが多いのである。これはやはり家族も人間で、辛いことを聞きたくないのかもしれない。

その他、本人の気持ちを勝手に先取りしたり、表面だけの理解に終始したりして、トラブルや悪循環を誘発してしまうのである。そして、治療者に向って「さっぱり、本人の気持ちが分かりません」と訴えてくるのであるが、この時は、家族の理解を深めさせる絶好のチャンスである。

IX. 本人の訴え・怒りに対しての対応困難

本人は、時に、家族に対して「どうにかしてくれ」「どうしたらいいんだ」という訴えをすることが多いが、これに対して殆どの家族は困惑する。沈黙したり、「どうするといっても・・・」口ごもると、本人はふくれるし、「どうして欲しいの」と訊いても怒るばかりである。

この時「どうしたらいいかわからないんやね。とりあえずどうして欲しいか言えるかな」ぐらいの優しい対応で落ち着くことが多い。しかし、なかなか家族がそこまで言うのは難しい。

また「俺がこうなったのはお前らのせいだ」と怒って来た時「そんなことはない」と否定と弁解に終始すると、本人の怒りはますますひどくなる。彼がどうして、そう言わざるを得ないのか考えていくことが大事なのにそこまでする余裕がないのである。

X. 波長合わせが困難

このように、家族は、本人の気持ちを理解し、それに波長を合わせていくことが苦手である。波長合わせとは、「相手の気持ちを理解し、その気持ちにふさわしい対応をしていく」ということである。すなわち、本人が怒っているか、さびしがっているか、落胆しているか、辛がっているか、ホッとしているかなどを察知し、それに対して適切な態度を取るのであるが、家族はそもそも本人の気持ちを適切につかめないでいる。だから、本人が話しかけてほしいと思っている時には何もせず、そっとして欲しいと思っている時に話しかけたりするのである。

XI. その他の治療妨害要因

今までの記述でも感じられたと思うが、畢竟、家族の不適切な対応は、患者本人のそれと変わることはない。両者はとも人間なのである。それ故、家族の妨害要因の記述も、患者のときと変わらなくなって来るが、以下は特に問題だと思われる点について浮かんできたまま、箇条書きにし、また家族への対応のときに詳しく記すことにする。

- ・共同作業が苦手（ほんにんのやりたいことについて、本人と話し合いながら、歩調を合わせて進むことが出来ない）
- ・本人の要求をすぐ否定する（「アメリカに留学したい」とか「一人でアパート暮らしをしたい」といった、活動や自立への意欲を、すぐに無理だといって否定する）

- ・本人を問い詰めてしまう（本人が「俺がこうなったのは、お前たちのせいだから、何とかしろ」と言われたとき、「どうすればいいの。どうして欲しいの」と返すなどのことである。患者は、思考力・想像力・表現力とも弱っているの、どう答えていいかわからないのである。これと同じように、家族は自分が分からない時、患者の状態を無視して、無理な問い詰めをしてしまう。本人の気持ちを聞くのは大事だが、患者の答えられる質問を工夫すべきである）
- ・本人を不安にさせる（本来は、患者を安心させなければならないのに、「どうしたらいいのかしら。これからどうなるのかしら」と言ったりして、本人に知らずに不安をぶつけてしまうのである）
- ・過度の罪悪感（家族が、本人の育て方に罪悪感を感じてしまうものである。治療者が、いくら「あなたは悪くない」と言っても簡単にはやわらがない。こんな場合は、むしろ罪悪感の内容や起源を聞きながら、罪悪感を持つこと自身が愛情の証であることを伝え、それを今後の反省や出発点にしなが、適切な対応を探りましょう、というのが適切である）
- ・過干渉、過保護、要求先取り傾向（そうは言っても、親の過干渉、特に本人が要求する前に「これが欲しいんでしょう」と言って、要求を先取りすると、本人の主体性は育ちにくい）
- ・無関心、過度の放任傾向（逆に、過度にほったらかしにすると、基本的信頼感が育たなくなることがある）
- ・適切な評価ができない（逆に、不自然なおだてが起きやすい）
- ・適切な期待ができない（期待し過ぎたり、まったく期待しなかったりするのどちらもよくない）
- ・言いなりになること（本人を恐れすぎて、言いなりになると、本人は情けない親と感じ、ますます悪くなってしまう）
- ・絶望感、あきらめ（苦しい状態や病状が長引くと、家族はあきらめてしまいやすい。この時、治療者は家族を支える必要がある。家族こそ、最大の治療者なのである）

その他、まだまだあると思われるが、とりあえず第9号はここで終わり、次の治療者の妨害要因・問題点の検討に移っていく。